



春はすぐそこまで

2月になり、強い寒気が流れ込み、厳しい寒さの日が続きました。

長期予報では、3月になると一時的な寒の戻りはあっても、平年より気温が高い傾向で暖かい日が多くなるとのことです。

モモやスモモの生長も進みそうです。春はすぐそこまでやって来ているようですね。



神金囲碁の会がスタート



2月5日から「神金囲碁の会」が始まりました。囲碁で楽しんでいたところ、児童クラブの子どもたちも参加し、子どもたちにも囲碁の楽しさを伝えることもできました。

5日と15日の午後1時から開催していますので、多くの方々の参加をお待ちしています。



神金トピックス&ニュース

◇神金健康推進会◇

第27回神金地区の健康をすすめるつどい

2月15日、神金健康推進会主催の「第27回神金地区の健康をすすめるつどい」が開催されました。

認定カウンセラーの「川辺修作先生」を講師におむかえし、「楽しく笑って健康に」をテーマにお話をうかがいました。川辺先生は、山梨落語研究会に所属し、墨亭河童のとして高座にたたれています。

講演の中では、歌を歌うなどして参加者もいっしょに楽しみました。

公演後には、本職顔負けの落語を二題披露していただき、楽しい時間を過ごすことができました。

準備していただいた、健康推進会の役員の皆様には、ありがとうございました。



人文字及び集合写真真空撮事業

1月18日、塩山北中校庭において、人文字・集合写真真空撮事業が開催され、在校生、卒業生、地域のみなさんなど558名に参加いただき実施しました。ご協力ありがとうございました。



神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が、神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

新青梅街道 十三

新青梅街道のうち、神金村の受け持ち区域は二期に分かれて施行された。第一期工事は千野・赤尾橋の架橋費の十分の一の金百貳拾円五十銭を神金・大藤両村で負担した。道は各橋から裂石の祝橋まで従来の道を利用せず理想的な直線道路を設計したのである。神金村の潰地は三町一反四畝貳拾歩である。裂石までの第一期工事は小田原橋・根子橋の架橋や上小田原地区上平・上手林地内までが予想以上の難工事だった。そのため甲府監獄（刑務所）の囚人の応援を得た記録があるが、その他幾多の苦難があったことは想像される。引続いて第二期工事についての陳情書が明治八年十一月二十八日付にて県令藤村紫郎宛に出されている。

丹波山村戸長酒井賢佐・神金村矢崎治兵衛（上小田原）・大藤村芦沢弥兵衛（上粟生野）・古谷通貞（中萩原）・七里村古屋唯重以上五名が代表者として、長文にて「今迄の大菩薩峠越えの道路にては日ごとに増加する物資の運輸来往には事欠き、地域の発展は覚束ない。若し柳沢峠越えの新道路が開鑿されるならば、当地区のみならず東京・横浜に通ずる大輸送路にて本県は申すに及ばず百萬人民の利益となることは必定である。我々二区一村二千三百戸一丸となって開鑿に盡力する覚悟です」と真情を訴えている。

県では地元の要望により十二月七日付にて内務大臣大久保利通宛に長文の陳情書が提出されている。県令の立場から天下国家のため大所高所より説き、新道路開鑿の許可と官費の助成を要望している。この陳情書の冒頭に「小田原村牛王土橋より丹波山村に至る五里余の間」とあるが、小田原村のどこに牛王土橋があるか皆目分らない。誰に聞いても知る大はいない。辞典で見ると牛王とは社寺で出す護符の一種で、天下萬民の災厄を除くものであるという。思うに牛王橋とは現在の祝橋であると思う。ここは雲峰寺・金比羅宮の境内に接し傍らに黒門（山門）があり、前面には白華岩があつて神域の地にある橋なので名付けたものと思う。しかし地元になじまず今の祝橋になったものと思う。裂石から柳沢峠を越えて落合の藤尾までは道路があつたが、それから先は人跡未踏の地であつた。

*次ページに続く

神金の歴史

第二期工事は内務相の許可を得て漸くたった明治九年五月五日から着工することになった。工事にあたって「青梅街道新拓事業概則」を定め、金銭・人夫等をはじめ工事全般にわたり厳しい規則により行われたのである。先ず、人夫は人夫小屋（飯場）に収容し、十名を一組としてその内から伍長を定め、人夫の世話と督励をする。就業時間は午前六時から午後六時までとする。賃金是一等より七等までとし、平均賃金は金拾五銭五厘とする。炊事は人夫が交替にて行う等々計四十一箇条を定めて、嚴重な監督と指導により行われたものである。

明治八年十一月に定められた「牛王土橋より丹波奥秋迄開築目論見帳（設計書）」がある。それには第一区より第百九十一区まで各区間の間数・土掘・石割・石積・焰硝（火薬）の使用量等々が細かく記載されている。第五十六号区が柳沢峠である。間数二千八百五十六間、石割職人四千六百六十七人、土方職七千四百六十四人五歩、石積二百四十人、焰硝三百六十八貫五百六十匁、架橋数八、金二百三十八円七十七銭七厘五毛、以上が柳沢峠までの合計明細の一部である。現在のように機器を使用せず、眼と勘によってつくられたものだが、大きな差違はなかったそうである。

第二期工事は苦難の結果、明治十一年六月三十日に竣工した。地元民の強い熱意と藤村県令の強権と英断によって開通した新青梅街道は、東京都が上水道の水源地の保護管理のためと、本県の努力によって順次改良され、昭和五十七年四月一日国道（四一一）に昇格し、今後ますます整備されると共に地域社会の発展に寄与することと思う。

今は、全線滑らかなアスファルトに舗装され、この道を通る大すべてが利便を得ているが、この道を後の世の人のためにと並々ならぬ努力をした人々、資材を寄付して協力した人々、工事中死傷された人々、鎖に足を繋がれて働いた監獄の囚人の人々、更に封建社会の弱い人々の血と汗と涙が注がれていることを忘れず心して歩みたい。

（参考文書）中萩原古谷徳郎氏所蔵

